



患者の声から理解する 心房細動診療の見方・考え方 西原崇創 著

● A5・174頁 2016年11月
定価：本体 2,800円＋税
[ISBN 978-4-89590-582-4]三輪書店刊

西原先生の説明能力は池上彰を超える！ 一番わかりやすい心房細動指南本

循環器内科の外来でもっともエネルギーを使うことの1つが心房細動患者への対応である。心房細動とは何かを説明することから始まる。さらに脳梗塞発症の懸念があることを伝え、抗凝固薬の必要性を説き、抗凝固療法にともなう出血性リスクについて説明し、ワルファリンと新規経口抗凝固薬(DOAC)の得失やアブレーションについても理解してもらって・・・と多くのことを語らなければならない。ご高齢であることが多い心房細動の患者は理解できているのであろうか。中には消化不良に陥っている患者・家族もいることであろう。説明を受ける側にとって理解が不十分となるのは、説明する医師の頭の中でポイントの整理が十分になされていないことも理由の1つではないか。

日本一わかりやすく説明してくれる解説者といえば、池上彰さんの名前があがるのではないか。池上彰さんの凄さは、難しい話を、わかりやすく伝えてくれるところにある。今まで興味を持てなかったような政治や社会の難しいニュースでもわかり易い事例に例えて平易な言葉で語ってくれる。西原崇創先生が書き下した『患者の声から理解する心房細動診療の見方・考え方』を読ませてもらい、西原先生は医療業界の『池上彰』であるとの思いに至った。語り口は判りやすく平易でありながら、その記されている内容のレベルは非常に高い。数多くの臨床試験のデータを掲載しながら展開されているので、心房細動について解説した類書に劣ることなく専門的知識に到達できる医学書である。池上彰さんがインタビューで、判りやすく解説する秘訣は、インプットした知識に自分なりの視点や意見を加えて、パワーアップさせたものをアウトプットできるかという問題であると語るのを聞いたことがある。西原先生は、心房細動についての知識を高いレベルでアウトプットしている。まさに池上彰さんの奥義に到達しているといえよう。

しかも本書は構成が斬新である。中年太りの55歳という設定の主人公が心房細動と診断されてから、内科治療開始に始まり最終的にはアブレーション治療について考える過程をストーリー仕立てで紹介している。文章は軽妙で、会話調の掛け合いがテンポよく読者を惹きつける。不整脈関係の医学書は読み進めるうちに、眠気を催すという副作用をもつことが多いが、本書には睡眠導入剤としての効用なく、一気に読み進んでしまう。本書の中にいる主人公が、自分の目の前に実在する患者として感情移入して引き込まれる。主人公が心房細動という疾患と治療の知識を理解していくだけでない。本書で特筆すべきことは、西原先生が主人公の悩みや行動心理についても巧妙に紹介していることである。患者の心の揺れが手に取るように伝わってくる。心房細動になり不安いっぱい患者の心理を学ぶことができるのは他書にはないポイントである。心房細動という疾患の医学的知見が経糸(たていと)となり、患者心理が緯糸(よこいと)となり複雑に絡み合って本書が織り上げられている。

西原先生は医師としての能力に加えて、どこでこのような文筆能力と説明能力を極めたのであろうか。神様は、時に不公平にも思えるまでに一人の人物に多くの才能を授けるという。その祝福をうけたのが西原先生であろうか。小生は嫉妬を禁じ得ない。彼は、聖路加のチーフレジデントを経て離島医療から大学の専門医まで幅広く活躍するスーパードクターである。その才能は医学を超えて著述の世界にも広がることが伝わってくる。不整脈治療に携わる専門医はもちろん、心房細動患者に遭遇する可能性のある全ての一般内科医に手にとってほしい一冊である。さらには、自らの疾患について理解して正しい治療を受けたいと願う心房細動患者にとっても価値ある一冊といえる。

西原崇創先生は、いつの日か直木賞受賞作家になるのではないかと感じながら、この書評を書かせてもらった。私は、次回作を楽しみにする愛読者になった。